

セッコクのプライマリー交配品種(その2)

夏井 高人

※ ラン・ユリ部会ニュース 2013年9月号 15～21頁に掲載した「セッコクのプライマリー交配品種(その1)」の続きです。

3 重要なプライマリー交配品種:カシオーブとイセ

セッコク (*Dendrobium moniliforme*) のプライマリー交配品種の中で最も重要なものは、カシオーブ (*Dendrobium Cassiope* (*Dendrobium moniliforme* × *Dendrobium nobile*)) とイセ (*Dendrobium Ise* (*Dendrobium moniliforme* × *Dendrobium stricklandianum*)) の2品種だろうと思われる。

どちらの品種についても自然交雑が古くから存在した可能性があり、また、江戸時代以前に人工交配が試みられていた可能性及び栽培場内での自然交雑等を否定することができない¹。そして、カシオーブとイセは、相当古い時代から石斛類の交配親として用いられてきたのではないかと推定することができる。このように考えることが荒唐無稽だとは思わない²。

以下、カシオーブ、イセの順に来歴や登録について、その要点を簡単に述べる。

4 デンドロビウム・カシオーブ (*Dendrobium Cassiope*)

カシオーブ (*Dendrobium Cassiope*) は、セッコク (*Dendrobium moniliforme*) を子房親 (seed plant) とし、デンドロビウム・ノビル (*Dendrobium nobile*) を花粉親 (pollen plant) として、N.C. クックソン (N.C. Cookson) ³によって作出された人工交配品種で、

1890年（明治23年）に RHS 登録されている。推測だが、英国のような寒冷なところでも栽培可能とするため、比較的耐寒性の高いセッコクとの交配が試みられたのではないかと思われる。N.C. Cookson は、カシオーブをノビルで戻し交配し、外見上はノビルにしか見えないけれども耐寒性の高い品種⁴も作出していたらしい⁵。

しかし、作出当初は、英国のサンダー商会により、新発見の原種ランとして紹介されていたようで、1894年に同商会が出版した図版には「*Dendrobium cassiope*」との原種としての名称が付されている⁶。このようなやや欺瞞的な商法は、1890年当時以来、現在に至るまであり、洋蘭及び古典園芸ともにランの世界ではそれほど珍しいことではない⁷。1890年に RHS 登録されている品種を1894年に原種として紹介するというあたりのサンダー商会の神経の太さには脱帽せざるを得ないが、それにしても、ラン新種の苗を欲しがらる愛好家がいかに多かったかを推測させるのに十分な事例ではないかと思われる。そして、当時、日本においては文明開化の波の中で盛んに洋蘭が輸入されていたことから、人工交配品を野生種として商品化する文化まで（中国経由の場合を含め）英国から輸入してしまった可能性はある⁸。

カシオーブは、現在の日本でも流通している。しかし、その大半は、N.C. Cookson が作出した個体からの分け株等ではなく、後代に至って新たに交配され復元されたものだとされている⁹。

これまで多数の石斛類を実際に見て写真撮影してきた経験によると、カシオーブと同様の外形的特徴を有する石斛品種が確かに存在するように思われる。しかし、多くの場合、その来歴が曖昧なので、確実なことは将来の遺伝子解析による解明を待つしかない状態にある。

このような来歴不明な石斛品種は別として、カシオーブとの交配品種として正式に RHS 登録されたものも多数ある。網羅的に調べることは非常に困難なので、カシオーブと他のランを交配し

て作出された品種だけを示すと，次のようなものが RHS 登録されている。

Dendrobium Amanogawa

Dendrobium Cassiope × *Dendrobium Myojo*

Takaki O.N.

<http://blog.goo.ne.jp/manabe002000/e/aed90183fc0fc7e17d172aceeb9a9a38>

Dendrobium Benisuzume

Dendrobium Cassiope × *Dendrobium Pergale*

K. Ohnishi

01/01/1982

Dendrobium Fubuki

Dendrobium Cassiope × *Dendrobium Pinocchio*

J. Yamamoto

28/07/1975

Dendrobium Hinamatsuri

Dendrobium Cassiope × *Dendrobium Malones*

T. Yoshino

01/01/1983

Dendrobium Mikasa

Dendrobium Cassiope × *Dendrobium Konan*

J. Yamamoto

01/01/1978

Dendrobium Nagasakimusume

Dendrobium Cassiope × *Dendrobium* Kongoh

T. Kato

01/01/1979

Dendrobium Nodoka

Dendrobium Cassiope × *Dendrobium* Perfection

Shimadzu

01/01/1939

http://userdisk.webry.biglobe.ne.jp/004/981/52/N000/000/003/123458393087616230028_2009awardH.JPG

Dendrobium Snowflake (1904)

Dendrobium Cassiope × *Dendrobium* nobile

Colman

01/01/1904

Dendrobium Red Nagasaki

Dendrobium Cassiope × *Dendrobium* Nagasakimusume

T. Kato

<http://apps.rhs.org.uk/horticulturaldatabase/orchidregister/orchiddetails.asp?ID=48214>

Dendrobium Subaru

Dendrobium Cassiope × *Dendrobium* Permos

K. Ohnishi

01/01/1982

Dendrobium Himezakura

Dendrobium Oberon × *Dendrobium* Cassiope

J. Yamamoto

28/02/1995

Dendrobium Kurenai

Dendrobium Komachimusume × *Dendrobium* Cassiope

N. Asai

01/01/1982

これらの交配品種の中で有名な石斛品種と酷似するものが決して少なくない。実際には全く関係がないのかもしれないが、交配が何度も重ねられ、非常に多数の園芸品種が作出されるようになると、相互に非常によく似た外形的特徴をもつ品種が作出されてしまうことはしばしばあることだ。

そのことが園芸業界の大きな衰退原因の一つともなり得ることは、これまでのラン園芸の歴史が示すとおりではないかと思う。

(続く)

[注記]

¹ かなり古い時代に中国や朝鮮半島から「石斛 (セキコク)」として日本にもたらされてきたもの (鉄皮石斛や細茎石斛の乾燥茎等) が、当時有力だった神社 (特に少彦名神を主神としてまつる神社) の神域内で植栽された可能性、あるいは、(古代において

は医学と呪術とが分離されていなかったため) 呪術を得意とした特定の氏族や修験道の行者等を介して、それらと関連する寺社の周辺にある山地や森林等に植栽された可能性、そして、そのようにして人工的に移植された渡来石斛類が自然に増える中で日本の野生種等と自然交雑した可能性は十分にあり得ると考える。例えば、北村四郎編『滋賀県植物誌』(保育社、1968) 146 頁では、昭和 48 年当時の滋賀県内におけるセキコク (*Dendrobium moniliforme*) の自生地として、「比叡山根本中堂付近」のみを記載しているが、このことは、何事かを推察するのに十分な極めて意味深いものだと思われる。

² 江戸時代から続く長生蘭の品種「金龍」と「銀龍」は、「唐物」と表現され、中国から渡来した舶来品の石斛類だとの認識が江戸時代からあった。「金龍」と「銀龍」は、いずれも日本の野生種セッコクとはかなり異なる形質を有しているが、おそらくイセ類似の自然交雑または人工交配由来の品種ではないかと推定される。

³ N.C. Cookson という人の詳細についてはよくわからない。しかし、多数のラン交配品種を作出したことで有名な人で、現在でも RHS 登録されている品種としては *Dendrobium Sybil* (*Dendrobium pendulum* × *Dendrobium linawianum*) などがある。また、N.C. Cookson は、*Dendrobium nobile* 'Cooksoniae' (当初の名前は「*Dendrobium nobile* Cooksonianum」) にその名を残している。

Dendrobium nobile 'Cooksoniae' は、デンドロビウム・ノビルの一品種として扱われているけれども、実はセッコクとの交配種すなわちデンドロビウム・カシオーブそのものである可能性がある。N.C. Cookson に関しては、Boyle Frederick という人が書いた『About Orchids: A Chat』という本の中で触れられている。

⁴ 現在の日本の洋蘭の世界でデンドロビウム・ノビルとして流通し栽培されているランの中にもカシオーブをノビルで戻し交配した品種が含まれていると考える関係者は決して少なくない。それどころか、やや小型で耐寒性の強いノビルは全部カシオーブの戻し交配品ではないかと疑う向きもある。

⁵ 前掲『About Orchids: A Chat』の中に N.C. Cookson が交配して作出したラン交配種のリストが含まれているが、そのリストをよく

読むとそのことを推測することができる。

6 *Dendrobium cassiope* Hort. ex Rolfe

<http://orchid.unibas.ch/phpMyHerbarium/307822/1////specimen.php>
[2013年11月3日確認]

7 現在でも原種として扱われているかなり有名なデンドロビウム、パフィオペディラム、カトレア等の中にも類似の例が幾つかある。前掲『About Orchids: A Chat』は、ラン原種であることを示すイタリック体小文字の表記とラン交配品種であることを示すローマン体大文字の表記とを明確に使い分けて書かれている書籍だが、その中には、N.C. Cookson による交配との関係で、

「*Dendrobium Falconerii*」及び「*Dendrobium Wardianum*」との記述があり、非常に興味深い。

8 このように交配品種を野生種だと偽って商品化する行為は、そもそも消費者保護法制が存在しなかった明治時代においてはともかくとして、現在では関連法規によって違法なものとされており、悪質な事案については行政処分や罰則の適用などがあり得る。詳細は割愛する。

9 「セッコクのプライマリー交配品種（その1）」で触れた長崎の医師古瀬光氏が復元交配して作出した個体のほか、山本デンドロビウム（山本二郎氏）が復元交配して作出した個体などが商品であるカシオーブとして流通していると考えられる。